中世九州禅院入寺関係未刊史料をめぐって

山口隼正

Some Unpublished Historical Materials Concerning the Appointment of Chief Priests at Zen Temples in Medieval Kyūshū

Takamasa YAMAGUCHI

ここのところ、全国の五山系禅宗寺院の史料、特にその入寺関係史料（公帖、入寺語録、入寺疏など。入寺とは、新住持として任命された寺院に着任すること）の文体や構造に関心をいだいており、若干の事例を公表してきた（注1）。

その間、いうまでもなく関係史料の原文の収集に努め、先年、「博多禅院入寺関係未刊史料」と題し、応仁以前の博多禅院入寺関係史料のうち、本文が未刊だと思われるものを紹介し、適宜コメントを施してみた（『九州史学』一二一号、一九九八年八月。以下、「前稿」とも略す）。周知のように中世の博多（筑前）は、鎌倉・京都について、禅院とりわけ五山系寺院が集中しており（特に十刹たる聖福寺・承天寺・崇福寺が存在）、これらに関して史料集の刊行や精細な研究が重ねられているが、意外にも割と多くの未刊史料（特に入寺語録、入寺疏）を紹介できた。

本稿では、中世の九州だが、博多以外の地域について禅院入寺関係未刊史料―特に入寺語録と入寺疏―の本文を紹介し、若干コメントを加えてみたい。それを通して、新知見も間々得られるであろう。

なお公帖（住持職任命書）だが、中世九州関係（応仁以前）のもの（特に豊後万寿寺＝文和元年、壱岐安国寺＝応永三年、筑前聖福寺＝応永十年についての公帖は原本）は何らかの形で既に活字化されており、あらためて本文を紹介すべきものは見当たらない。

A　豊後・万寿寺関係

豊後の万寿寺（聖一派）は、開基大友貞親（豊後国守護四代）、開山直翁智侃（聖一派）だが、十四世紀前半のこと、早くも建武年間

に十刹（五山系寺院の第二ランク）になっている。関係史料が多く（九州では博多十刹・聖福寺関係についで多い）、入寺語録（建武元年＝一三三四など）、入寺疏、それに公帖（文和元年＝一三五二、原本）がのこされ、殆ど活字化されているが（注2）、次のように未刊のものもある。

①［九鼎重禅師疏］江湖疏 ○建仁寺両足院蔵本

瑩中住豊蔣山萬壽
寺似金陵　彷聞六朝之佳麗
海環紫塞　余見長城之委遅
茲挙擬乎万里封侯　　某　筌蹄諸部
矧境拠乎一方勝概　　陶冶重玄
登五台見文殊　挙玻璃盞　継家学於寝微
立三関宗積翠　斥薬汞銀　挹海色而将老
故人厚禄　未忘削牘之恭
弟子伝経　勿徐出関之馭
白栴檀消除衆熱　銕蒺藜験過諸方
桂海氷天月竈風丘　櫪驥有志
閩謳楚諸烟帆雨檝　沙鷗同盟

②［九鼎重禅師疏］諸山疏 ○建仁寺両足院蔵本

前永福航川順西堂住筑［豊］蔣山
木笏少衆笏多　莫過今日
割刀用鸞刀貴　焉返古時
久矣提唱失真　　風流蘊藉
幸哉選挙有序　　某　履践清華
蚤歳洛下声名　不譲少年賈誼
晩暮里中帰臥　毎念平生少游
当機掲示栗棘蓬　信歩蹈断蓮華国
龍盂虎錫　将試遠遊於遐方
鶩雪蝋氷　宜除苦悩於炎熱
不唯位超累父　抑亦縁熟賢侯
草根南磵木末北山　想看勝概
若英西溟扶桑東海　願挹余光

［九鼎重禅師疏］は、九鼎竺重（十五世紀中葉、嘉吉～文安年間に活躍した法燈派の僧。玉村竹二『五山禅僧伝記集成』九九ページ参照）が作成した入寺疏の集成で、実際にカードを採ってみるに、山門疏・諸山疏・江湖疏・同門疏から成り合計四三点である。

右の①は、その一つで、瑩中□□が豊後・万寿寺住持になったことを知らせる。②は、前永福寺住持の航川□順が万寿寺住持になったことを示す。なお見出しに「住筑蔣山」とあるが、正しくは「住豊蔣山」とすべきで（「蔣山」とは豊後万寿寺の山号で、これ以外に該当するものはない）、また「永福」寺とは、白雲慧暁（聖一派、永仁五年＝一二九七寂）が開山した安芸・永福寺（諸山）を指すと考えられる（注3）。航川は、五山＝官寺制度下、諸山たる安芸・永福寺住持から、ここに十刹たる豊後・万寿寺住持に昇住、栄転したといえよう。

この［九鼎重禅師疏］には、後掲のように日向安国寺諸山疏も収録され（K）、前稿に示したように筑前博多の聖福寺山門疏（A⑨）や妙楽寺山門疏（E）も収録されている。

③［晦夫集］道旧疏　○東福寺大機院蔵本

○知新岳住蒋山

苦海可度　願乗子産之輿　力済末法襄俗
濁世難澄　誰攬范滂之轡　是謂大慈度生
某　水鏡無痕　天球不琢
戯謔不為虐　喜万朔之智類滑稽　提乃祖正伝卯
博愛是謂仁　嫉張湯之辞如老史　振先師已墜宗
南陽輟畔　遽起屮廬之蟄　出則為人
北岳休誚　儻慰蕙帳之寒　往以行道
貪時之交弃如土　君尚存焉
同心之言臭若蘭　我所庶也

［晦夫集］は、信仲明篤（宝徳三年、一四五一寂）が作成した入寺疏の集成で、本文未刊のものが多い。

右の③は、新岳□知がこの万寿寺に入寺する際の道旧疏である。『晦庵稿』（『続群書類従』巻八三二、刊本二八輯下、九四ページ）に「□□岳住蒋山道旧疏」が収録され、もともと同文だといえようが、両者を対比するに、『晦庵稿』の方はいわばベタ書きであり、字句の配列も若干異なり、欠字箇所も多い。［晦夫集］所収の③の方が、もとの形に近いと思える（注4）。なお、この［晦夫集］には、後掲のように豊後宝陀寺山門疏（B）や、前稿に示したように博多の聖福寺山門疏（A⑦⑧）や承天寺山門疏（Bⓕ）なども収録されている。

④［諸師疏語集］江湖　○東福寺大機院蔵本

○玉林住豊後萬壽

南陽之鐘豊城之剣　蓋待其時
鐘山之英艸堂之霊　以慰吾望
欲継登龍芳烈　必須攀鱗俊流
某　莫々横機　堂々儀表
仏果返蜀　寧夸負弩之榮
円照入杭　尚紆具舟之策
道以徳斉以礼　蔵諸用顕諸仁
物々安心　方丈散曼陀雨
塵々清泰　袈裟吹菡萏香
扶起破沙盆　還他臭種艸
同夢猿鶴之侶　尋盟鷗鷺之群

［諸師疏語集］（東福寺大機院蔵本）は、実際にカードを採ってみるに、はじめに作者を記してない入寺疏（いわば無名疏）が二八点ほどあり、続いて化縁疏三点、そして伯英儁禅師疏二六点、大本中禅師疏九点、雲渓山禅師疏二八点、夢岩応禅師疏一七点、無隠爾禅師疏七点、在先有禅師疏四点から成るように、これら南北朝期に活躍した禅僧たちによる入寺疏が配列されているが、未刊のものが多い。

右の④は、はじめの無名疏のうちの一つで、玉林昌旒（南北朝期、夢窓派）がこの豊後万寿寺に入寺する際の江湖疏である。

なお、この［諸師疏語集］の夢岩応禅師疏のうちに「絶際住豊之万寿」江湖疏が含まれているが、これに該当するものが『旱霖集』（夢巌祖応の集）に「絶際住豊之万寿江湖疏」として見え、『旱霖集』収録の方が整っており、既に活字化されている（上村観光『五山文学全集』一―八二一ページ）ので、ここで本文の提示は省略する。

［諸師疏語集］には、前稿に示したように、筑前の承天寺（博多十刹）入寺疏（Bⓖ～ⓚ）や顕孝寺（諸山）入寺疏（Dⅱ）も収録されている。

B　豊後・宝陀寺関係

豊後の宝陀寺（聖一派）については（注5）、［晦夫集］（前出）に、つぎのような未刊の入寺疏が収録されている。浩初□年が宝陀寺に入寺する際の山門疏である。

［晦夫集］山門疏　○東福寺大機院蔵本

○年浩初住宝陀　仏印派下、南渓之子、自称西嶺山人、今起盛光

松社栖賢　猶濂渓之嚮仏印　儒仏不同而相為謀
桑門旺化　在柳州之識浩初　今昔雖異而若合契
某　剛大于気　諸方皆学剣学書　巧匠縮手
　温柔于容　若人独禅熟詩熟　拙枝何顔
首座行脚何暮哉　三遊湘寺　飛錫朝従洞賓
先師話頭未了畢　一臥洛涯　礼羅暮拔温造
不図南渓基業　慚尽澗林　梅花樹下
復見西嶺山人　慶充閭里　蓂莢階前
化千百億分身　塔院有江南所無梅
祝三十万暦数

C　豊後・崇祥寺関係

豊後・崇祥寺（聖一派）については（注6）、［霊松集］に、つぎのような未刊の入寺疏が収録されている。収録順に本文を提示しよう。

①［霊松集］疏　○上村観光氏蔵本

一花巌住豊後州雲龍山崇祥禅寺山門疏

風穴単丁草屋、数年後檀信遂新之、大智整頓叢規、百世下礼典猶在、是蓋継前賢芳躅、必須吾門耆英、某、徳宇洋々、声華藉々、紀綱祖仏、維艇已為唱導之師、鞭苔象龍、首座久了行脚之債、激起曹源滴水、挽回枯木春光、豊山之鐘霜降而鳴、維時感矣、羅浮之磬雨至而撃、説法熾然、然粛啓化儀、式毘　皇極、

②［霊松集］疏　○上村観光氏蔵本

龍室珠首座住崇祥同門疏　宝徳庚午三月日

同門　竊承
豊後州雲龍山崇祥禅寺適虚主席、大檀越命萬壽前板、龍室珠公法兄禅師往以補処、於是我同系在洛下者、聞斯盛挙、靡不歓抃、胥率作疏以慶云、

桃能紅李能白、萬物皆春、礬是弟梅是兄、四海博愛、頼脩通家之好、況際休明之時、某人、前輩風流、後生模範、栴檀林裏老手、金蘭簿上声名、枯木龍吟、竟知音於三千里外、蕙帳鸛怨、辞同袍於十一年前、豊城望射斗鏌鋣、石頭提住山鉞斧、天宮破夢、教人恨五更風、都門送離、勧君尽一盃酒、充勤末路、式倡先宗、

③［霊松集］疏　○上村観光氏蔵本

南金鏐首座住豊之雲龍山崇祥同門疏

隋侯之珠豈弾野雀、易分重軽、養由之弓不射田蛙、難蔵巧拙、致其用者、有是才耶、某人、見性為宗、出身有路、諳忠国師無縫塔、南陽多近親、提印首座折脚鐺、西蜀出名士、蓋弘宗特推真践、而学道

甚悪小成、仏日高山、初筵開雑華之会、曹源滴水、末運興少林之禅、美玉久韞櫝而沽哉、神剣終射斗之者也、蕭寺碧雲、謝村紅樹、願聞新題、秋風白髪夜雨青燈、尚記旧要、

［霊松集］（上村観光氏旧蔵本、史料編纂所謄写本）は、季亨玄厳（長禄元年＝一四五七寂、聖一派）が著者で全一冊、疏（入寺疏四〇点）・化疏（淋汗疏など四点）・雑著（序・祭文など三一点）から成り（合計七五点）、これらの本文は殆ど未刊のままだといえる。ここに提示した三点は、いずれも疏（入寺疏）として収録されるもので、①は花厳□一、②は龍室□珠、③は南金□鏐、それぞれが豊後・崇祥寺に入寺する際の疏である（山門疏、同門疏）。このうち②には、ご覧のように、見出しに「宝徳庚午三月日」とあって、年次がわかる（宝徳庚午＝二年、一四五〇）。

なお［霊松集］には、後掲のように肥前・興聖万寿寺入寺疏（F）や日向・大慈寺入寺疏（I）が収録され、前稿に示したように博多十刹の聖福寺入寺疏（A⑤⑥）や承天寺入寺疏（Bⓔ）も含まれている。著者の季亨玄厳が日向＝九州出身であるためか、九州関係の入寺疏が多い。

D　豊後・崇禅寺関係

国立公文書館の内閣文庫に［平田均和尚語録］が所蔵され（内閣文庫193函433号）、これに、平田慈均（？～貞治三年、一三六四寂。聖一派）が暦応二年（一三三九）に豊後・崇禅寺に入寺した際の語録が収録されている。未刊であるので（前出注1、拙稿「入寺語録の構造と年表」―別表「入寺語録年表」No.68）、ここに本文を提示しよう。全くの白文なので、適宜読点を施してみた。

［平田均和尚語録］○国立公文書館内閣文庫所蔵

平田均和尚住豊後州雲龍山崇禅々寺語録

師、於暦応二年十二月初一日受請、拈衣云、

有牛皮頑（？）、具虎體斑、提持得易、荷担得難、荷担後作什麼、肩衣云、不見道、世尊伝金襴、

十二月十二日入院、指山門云、

尽大地解脱門、無窠臼、無途轍、驟歩、看々、発梱外清風、揭域中日月、

仏殿、無上士天師二千年前、

吽々、聞名不如見面、

土地、聡明大士諾惺々諾、牢記霊山不嘱諾々、

祖師、伝仏心印各上祖位、低声々々、墻壁有耳、

拋室、横主丈云、正令全提、仏祖無分窺覷、卓丈云、線路放開、雲従龍、風従虎、

法座、此座高広、果然々々、驟歩云、莫道須弥灯王挽（？）先、

祝聖、大日本国豊後州雲龍山崇禅々寺住持伝法臣僧慈均、虔爇宝香、端為祝延　今上皇帝聖躬万歳々々万々歳、

皇帝陛下、恭惟、金輪統御、寿山不騫不崩、玉葉騰芳、福海愈深愈広、

将軍、此香、奉為特進亜相征夷大将軍増崇禄算、伏願、坐致九州有截之太平、鎮護振古無双之皇記、

檀那、此香、奉為大檀越賢太守洎合城豪貴増崇禄算、伏願、有彭祖方朔之寿考而柱石朝庭、賢于給孤之檀心而金湯祖道、

嗣香、此香、元無香気、豈求点飾、零々砕々底、従仍臼裏得尽情爇却、供養恵日第三世本師道山和尚、用酬法乳之恩、

索話、逢人則不出、万別千差坐断去、出則便為人、百醜千拙一時露、

不渉二途、試請道看、問答不録、乃云、諸仏不出、四十九年説当甚剣盾、一決（？）祖師不西来、少林有妙訣、崑崙嚼生鉄、人々具足無余無欠、各々円成渾金璞玉、直得山青水緑、太平無蒙、大切不宰、道箇惟□□於佗吾本来此土伝法救迷情□□売向虚空絵彩、雖然衲僧門下無、

昨日孤峰頂上、万機休罷、千聖不携、今日入這保社、打開席閑東破西随分施設、所謂我成法王、於法自在、必竟祝聖一句作麼生道、但見皇風成一片、不知何処是封疆、

挙、有人問東寺会禅師云、某甲擬和尚開堂得否、会曰、将物裏石頭煖即得彼無語、葉山和尚代云、石頭煖也、拈曰、箇折床会百重千匝、将謂門鍵（？）深密被葉山一覷、々破無処蔵身、諸人還要見二老耶、殷人以栢、周人以栗、

当晩小参、透得金剛圏還佗有力量提起破沙盆、須是英霊漢衆中莫有耳熱目瞤底麼、問答罷、以弗撃禅床左辺云、仏祖巴鼻、撃右云、衲僧巴鼻、直下承当一生参学事畢、其或未然、料掉没交渉、須知向上一路、千聖貯思停機堕坑落塹、是故携十余輩衲子進五六日途程、満身風雪経□蹈嶮、其間懸向上之一路、無賓主話、同条狗子一々於途中全提了、到這裡将何布施大衆、竪払云、長鬚翁忽出来云、長老々々方才入院、未陳化条、莫胡説乱道、良久云、三台須是大家催、

挙、趙州和尚一日於雪中臥曰、相救々々、有僧便去身辺臥、州起云、拈云、趙州古仏使得十二時□□用心、到這裏自救不了、者僧去身辺臥添一身蒭苴、山僧雖無力量、拈丈云、与同行木上坐□□云、現成活計十分円備卓丈一下云、人情、

右の入寺語録は、時期的に『大日本史料』六編五（既刊）に収録すべき史料だが、それに漏れているため、一往、綱文を立てれば暦応二年十二月十二日条「慈均平田、豊後崇禅寺住持ト為リ、是日、入寺ス」となり（注7）、補遺として追加できよう。この入寺語録の文中に「将軍」香（「奉為特進亜相征夷大将軍増崇禄算」云々）が備わっているので、これ以前に、既に崇禅寺は諸山になっているといえよう。

この崇禅寺に関する史料は、他に一向に見かけないが、『扶桑五山記』（二　日本禅院諸山座位次第事）において「豊後州」に「崇禅々寺［慈］平田道均、出世於此」と見え、まさに右に提示した「平田均和尚住豊後州雲龍山崇禅々寺語録」（暦応二年十二月）を典拠としたといえる。また『本朝高僧伝』（三十、浄禅三之十二）において、「京兆南禅寺沙門慈均伝」に「釈慈均、号平田、不詳姓氏、相州鎌倉人、徧遊講肆、知解甚博、後上京師、参慧日道山晟禅師、得単伝旨、（中略）暦応二年冬、出世豊之崇禅、嗣香酬道山、歴遷播之円応、洛之普門、東福」などと見え、同様である。やがて平田慈均は東福寺住持（二十四世）になっている（『扶桑五山記』五　東福寺住持位次）。

右の崇禅寺（D）と崇祥寺（C）とは、寺名が実に紛らわしい。即ち崇禅寺（D）については、［平田均和尚語録］に「平田均和尚住豊後州雲龍山崇禅々寺語録」と見えるが、崇祥寺（C）については、右に示した［霊松集］所収の「一花厳住豊後州雲龍山崇祥禅寺山門疏」など（①②③）のほか、全く別な史料だが惟肖得厳（燄慧派）作の［惟肖厳禅師疏］に「芑田穎首座住雲龍山崇祥寺江湖疏」（玉村竹二『五山文学新集』二巻一一五七ページ）があって、両寺は同じ山号「雲龍山」である。両寺は、ともに所在地こそ不明だが、そもそも名称が一字違い（崇祥寺―崇禅寺。しかも祥―禅は字形も似る）、同一国（豊後）にあって、同一の派（聖一派。京都五山東福寺開山の圓爾＝聖一国師に始まる派を指し、『扶桑五山記』では「東福派」

と表記される）に属し、しかも山号まで同じ（雲龍山）である。『蔭涼軒日録』においても、確かに両寺とも散見される（補注1）。

因みに『扶桑五山記』（二　日本禅院諸山座位次第事）では、両寺とも記載されているが（「豊後州」―「雲龍山崇祥禅寺」「崇禅々寺」）、『慧日山東福寺末寺簿』（史料編纂所所蔵）では、「甲刹」として崇祥寺は記載されているが（「豊後州　雲龍山崇祥寺」）、崇禅寺は見えない。『東福寺諸塔頭并十刹諸山略伝』（上村観光氏所蔵）においても同様、崇祥寺は見えるが、崇禅寺は見えない。

E　肥前・高城寺関係

肥前・高城寺だが（注8）、大道一以（正応五～応安三、一二九二～一三七〇。聖一派）の『大道和尚語録』に、入寺語録や入寺疏など数点が収録されており、つぎのような当寺関係の入寺疏が含まれている。未刊である。

［大道和尚語録］坤　○建仁寺両足院蔵本

高城円鑑開基請遠浦山門疏

高掲宸翰之額、光彩十分、別伝祖室之燈、正宗一派、説我山中話、要須山中人、共惟、
新命遠浦大禅師、仏祖肺肝、人天眼目、滑稽警敏、談劇味濃、分座訓徒、豈忘慧峯側耳、住山安衆、又見日峯点頭漾、碧池水清堪濯故郷之錦、畳青軒坐冷盍鋪吾家之氈、張帰帆以領略下載清風、爇宝香以追回上古舜日、

これは、遠浦□□が高城寺に入寺する際の「山門疏」である。高城寺は、周知のように文永七年（一二七〇）、源勝光が建て、蔵山順空（円鑑禅師）を開山とした禅寺である。大道一以は蔵山順空の法嗣である。遠浦は、彼らの後輩、同じ聖一派であろう。

この山門疏の見出しに「高城円鑑開基」とあって、聊か気にかかる。現在、禅宗史では開基（いわば最初のスポンサー）と開山（初代住持）とを使い分けている（高城寺の場合、開基は源勝光で、開山は円鑑禅師＝蔵山順空）。私自身、この点、早くから職場で同室の上司玉村竹二先生・今枝愛真先生から伺っていた。しかし、実際の史料では、このように紛らわしい表記で、混同されているような場合もあると気付いた。

この見出し「高城円鑑開基請遠浦山門疏」は、型の上で、普通の入寺疏の場合とは異なっている。いわば（仮称すれば）、この見出しは「某寺請某僧疏」型だが、本稿においても諸例を見るように、一般には「某僧住某寺疏」型である。これと同じ型（「某寺請某僧疏」型）の見出しの例は、少ないが、他に『済北集』（「龍山請潜渓山門疏」など）や『鈍鉄集』（「円覚請無為江湖疏」など）に見られる（『五山文学全集』一所収）。

F　肥前・興聖万寿寺関係

肥前・興聖万寿寺については（注9）、［霊松集］（前出）に次のような未刊の入寺疏が収録されている。廬山□廷（？）が当寺に入寺する際の山門疏である。この末尾に「正長戊申七月皇帝即位」とあるのは、まさにこの年、正長元年（戊申、一四二八）七月二十八日に後花園天皇が即位したことを指している。この疏の冒頭、即ち蒙頭部分に「鳳鳴朝陽　欣逢　新主践阼之日」とあって、この事実に照応しており、この疏（山門疏）も正長元年のものだといえよう。

［霊松集］疏　○上村観光氏蔵本

廷（？）廬山住肥前州水上山興聖寺山門疏

鳳鳴朝陽、欣逢　新主践阼之日、龍吟泓下、復聞古曲絶律之音、時豈偶然、天所啓也、某、襟懐涵水、筆力抜山、挑大明燈而瘍耀昏衢、建金剛幢以摧魔塁、取龍筋於東海、重覩続弦之珍奇、得烏頭於西川、其奈毒人之手段、爰迨霊樹結果、式逢枯木開花、既膺甲科、庶鎮法席、僧臘階前樹、猶記韓君平旧題、乾坤水上萍、孰賡杜拾遺絶唱、緬望　北闕、仰祝南山、　正長戊申七月皇帝即位

G　肥前・広福寺関係

肥前・広福寺については、あまり史料に恵まれないが（注10）、［晦夫集］（前出）に次のように入寺疏が収録され、貴重である。

［晦夫集］諸山疏　○東福寺大機院蔵本

○材樗翁住肥州蓬莱　祇樹父祖塔処　聖一国師道場　蓬来［莱］ハ広福寺也、

仏法何刧　感祇樹之秋風　転法輪則日了［々］是成道

仙凡幾塵　隔蓬莱之雲気　得真訣則処々便神山

某　学有淵源　眼無湖海　伝心卯［印］於爾祖　受指画於名緇

樗散鬢絲［絲］　誰怜冷官之鄭　修鳳楼不用十様牋

瓢飲簞［簞］食　我敬熱熟之顔　登龍門何索三倍価

久待首座行脚也　豈非吾邦知識乎

歳晩相期　招我有山中帰来之引

天涯惜別　贈君以陽関堕泪之声

これは、樗翁□材が広福寺（山号蓬莱山。蓬莱山三三〇メートルの山麓に所在）に入る際の「諸山疏」である。実は『晦庵稿』（続群書類従巻八三二）に「材樗翁肥州蓬莱江湖疏　祇樹父祖塔処」が収録されており（刊本二八輯下、九七ページ）、「江湖疏」だが、両者を対照するに、僅かに字句の異同があるものの、同文だといえる。一往ここに「諸山疏」の本文を提示し、字句に異同がある場合、適宜、該当箇所（文字）の下に［校訂注］で示した。

H　肥後・能仁浄土寺関係

肥後・能仁浄土寺については、史料が少ないが（注11）、幸い［（建仁）無涯仁浩禅師語録］（上村観光氏所蔵）に、無涯仁浩（永仁二～延文四、一二九四～一三五九。仏源派）が貞和四年（一三四八）に当寺に入寺する際の語録が収録されている。未刊で（前出注1、拙稿「入寺語録の構造と年表」―別表「入寺語録年表」No.80）、全く白文であるので、適宜読点を施しつつ、ここに本文を提示しよう。

この入寺語録は、『大日本史料』六編十一（既刊）に収録すべきだったが、それに漏れているので、一往、貞和四年十月一日条「仁浩（無涯）肥後能仁浄土寺住持ト為リ、是日、入寺ス」なる綱文を立てて、補遺として追加できよう。

当寺関係の入寺語録としては、他に『無規矩』所収の「天境和尚初住肥州鳳翔山浄土禅寺語録」（康永三年甲申十二月十四日入寺）があり（『五山文学新集』三巻、五ページ）、これも『大日本史料』既刊分（六編八）だが収録されていない。この入寺語録（康永三年、一三四四）には祝聖香に続いて将軍香（「此香、奉為特進亜相征夷大将軍」～）が備わっているので、これ以前、既に当寺は諸山になっていたとみてよかろう。

なお当寺の寺名は、ここに、康永三年（一三四四）十二月には「浄土禅寺」だが、貞和四年（一三四八）十月には「能仁浄土禅寺」と表記されている（山号は同じ「鳳翔山」）と気付く。

①［（建仁）無涯仁浩禅師語録］○上村観光氏所蔵

無涯和尚初住肥州鳳翔山能仁浄土禅寺語録　　門人　　等編

師、於貞和四年戊子十月一日、入山門云、大施門開、天寛地闊、驟歩云、脚頭脚尾七通八達、

宝殿、釈迦弥勒是它奴、它是阿誰、戴角菸菟当路坐、無毛鷂子貼天飛、

土地、那一通即不問、霊従何来、聖従何起、扣牙歯三下云、護法護僧只在這裏、

祖堂、東土西天二三四七、我来問訊、焼香也要眉毛斷結、

拠室、銅頭鉄額斉来便称龍麟、住々、不会作客労煩主人、

拈帖、定乾坤句当機難観、若見得、途中受用、若見不得、却請維那分明剖露、

山門疏、自家人説、自家話、鎮州蘿蔔、廬陵米価、

拈衣、鶏足山前等弥勒之出世、黄梅夜半断神秀之疑情、提起衣云、捻因這箇、且道、這箇従什麼処得来、不落見聞無朕跡由来対衆要分明、

法座、進一歩高一級、進歩一二三四五六七、

陞座、拈香云、大日本国鎮西路肥州鳳翔山浄土禅寺新住持伝法臣僧某、虔爇宝香、端為祝延

今上皇帝聖寿万歳々々万々歳、陛下、恭願、以須弥山為寿岳仰之弥高、用華蔵海為福源酌焉不竭、々々々々則唯広唯深、仰之弥高則可大可久、

次拈香、此香、奉為　征夷大将軍資陪禄算、伏願、襲千載之雅風、鎮万邦之春色、

此香、奉為大檀那吏部相公陪崇台禄、伏願、巍々寿山等妙高不動之山、浩々福海比般若甚深之海、高扶堯舜、永賛聖明、

就座、乃云、挙不顧、即差互、擬思量何刧悟、不堕両頭直須快進一歩、僧問、祥雲幕々鎮楼台、万仞重門八字開、是聖是凡、斉拱手銅頭鉄額豈能猜、師云、三台須是大家催、僧云、老師開堂演法異物致鳳凰来儀、好箇時節有何祥瑞、師云、霜葉紅於二月花、僧云、昔於中華参得少林之禅、今朝於鳳山説法応化、是一是二、師云、一点水墨、両処成龍、僧云、渉途程底即不問、如何是帰家穏坐底事、師云、不出門庭三五歩、看尽江山千万重、僧云、鳳凰不梧桐不栖、謂聾、師云、道得八成、僧云、三聖道、我逢人則出、々則不為人、此意如何、師云、眼看東南、意在西北、僧云、興化道、我逢人則不出、々則為人、意旨作麼生、師云、頻呼小玉元無事、只要檀郎認得声、僧云、鷺鷥立雪不同色、師云、分身両処看、僧云、真浄道二大老竊得臨済些子活計還端的也無、師云、作賊者心虚、僧云、只如吏部郎中相公、請師開堂演法、可謂櫜弓矢致太平、和尚瑞世接物利生、作家宗師天然猶在、師云、尋常一様、窓前月才有梅花、便不同、僧云、便見柱石邦家栄於聖世、金湯祖道播於明時、師云、古之今之、僧云、稠載行垂橐帰、便礼拝、

師、乃云、仏祖玄関、衲僧巴鼻、有眼覷不見、有口説不得、浩上坐平生只做箇百不知百不会底、長行粥飯、僧困来打睡、飢来喫飯、那能頓説漸説、従来説法二字掩耳而過無端、今日千里脩途、遠来住山単々地提持此事、挙弗子、看々、若仏若祖若聖若凡、尽向這裏放大光明、直得乾坤大地、風颯々地、衆中忽有犯、衆出来道、你且莫大驚小怪、清平世界切忌訛言、以弗子擊禅床、

復挙、三聖云、我逢人則出、々則不為人、興化道、我逢人則不出、々則便為人、二大老一人指桑樹罵槐樹、一人指槐樹罵桑樹、検点将来打鼓弄琵琶、元是一会人、

当晩小参、乃云、問在答処、答在問処、問答俱去、却便致一語来、僧問、一音才遍三千界、四衆忙　側耳听、師云、錦上添花有何不可、僧云、遍歴大唐国裏去瑞世扶桑国中来、正与麼時請師法要、師云、簷頭滴々、分明歴々、僧云、恁麼則鳳翔功不浪施、師云、莫認定盤星、僧云、記得、徳山小参示衆云、今夜不答話、問話者三十棒、意旨如何、師云、識取鈎頭意、僧云、時有僧出礼拝、山便打還有為人処也無、師云、一言已出駟難追、僧云、々々某甲也未問在、山云你是什麼処人、僧云新羅人、意在那裏、師云、挙不顧、即差互、僧云、山云未跨船舷時好与三十棒、又如何、師云、早是遅了、僧云、此僧与徳山恁麼告報輝映、古今未審、作麼生理会去、師云、不問者僧仏来也不着、僧云、一句無私千古利群生、師云、不許夜行、投明須到、僧云、四海聞名久、今宵見作家、師云、近見不如遠聞、師乃云、諸仏妙道巍々乎蕩々乎、不可得而名焉、然則山僧二十年前航海越漠遠入古宋遊歴、両浙三山江之東西湖之南北遍扣諸老門庭、孜々兀々力窮斯道之要妙、奈何根塵昏昧逾求逾遠、竟爾無成何知、今日被業風吹転、直到本朝鎮西路肥州鳳翔山浄土禅寺、登此法座、今夜不免対人天衆前、且欲露箇些子消息、忽有主丈子出来道長老、々々説箇甚麼、便頌一偈、供養大衆、今朝十月一四序将終畢、終而還復始々終、流水疾、嶺頭月未円、林梢風更急、為君一奏、没絃琴韻、出青霄、有何極、

復挙、龐居士問馬大師、不与万法為侶者、是甚麼人、大師云、待汝一口吸尽西江水、即向汝道、浩上坐便不然、若有人今夜出来道不与万法為侶是什麼人、便劈面与一掌、何待吸尽西江水夜深、久立珍重、

ここで、右に提示した入寺語録（貞和四年十月）の本文から、気付いた点に若干触れたい。

先ず新任住持が現地の寺院に到着した際、一般的には山門〜「仏殿」〜土地堂〜祖（祖師）堂という順で進んでいくが（先掲のD豊後崇禅寺入寺語録の場合も同様）、ここでは山門〜「宝殿」〜土地（堂）〜祖堂となっている。同寺＝肥後（能仁）浄土寺についても、先に触れた康永三年の入寺語録においては三門〜仏殿〜土地堂〜祖師堂となっている。僅かな例だが、他の寺院についても斯様な例がみられ、宝殿＝仏殿だといえる（注12）。

つぎに右の入寺語録において、拈香（焼香）部分は祝聖香〜将軍香〜檀那香の順だが、檀那香には「奉為大檀那吏部相公」などとあって気に懸かる。この肥後・能仁浄土寺の開基（最初の檀那）は、一般に菊池武房（菊池氏一〇代、蒙古襲来時に活躍）だといわれているが、ここに見える「大檀那吏部相公」（「吏部」は式部省の唐名）とは、菊池氏ではなく（該当するものが見当たらない）、恐らく大友氏、具体的には大友氏泰を指すと提起したい。大友氏泰は、当時、隣国の豊後守護だが、「式部丞」を称して文書を授受している（建武五〜正平七、一三三八〜一三五二。山口『南北朝期九州守護の研究』一五四〜一六四ページ参照）。康永三年の当寺の入寺語録（「天境和尚初住肥州鳳翔山浄土禅寺語録」）においても、祝聖香〜将軍香〜檀那香の順だが、檀那香には「奉為本寺大檀越吏部郎中」とあり同様である。要するに天境霊致（康永三年）〜無涯仁浩（貞和四年）は、当寺への入寺に際して、大壇越＝大檀那（スポンサー）たる大友氏泰に敬意を表して拈香（焼香）したといえる。当寺と大友氏との関係は、氏泰の父貞宗のときから始まったと推定できる（注13）。

右の入寺語録は、構造的に整っている。拈香（焼香）部分の次に

垂語＝索話（「就座、乃云」～）、続いて問答部分が備わっている（「僧問」～「師云」～「僧云」～）。当時の語録では「問答不録」としばしば見かけるが（例えば先掲Dの「平田均和尚住豊後州雲龍山崇禅々寺語録」）、ここでは問答の本文も記載されていて有り難い。そして提綱があり（「師、乃云」～）、結座（「復拳、三聖云～興化道～」）となっている。この結座（拈提）に示された古則（三聖慧然―興化存奨のこの問答）は、『五燈会元』十一、三聖慧然禅師の項に見えるが（蘇渕雷点校『五燈会元』中冊六五四ページ、中国仏教典籍選刊、中華書局、北京）、引用例を実際に点検したところ、この古則は、当時、我が国の入寺語録の結座において非常に多く見かけると気付いた（前稿『九州史学』一二一号、六七ページ）。

「当晩小参」も備わっているが、そこにも問答の本文（補注3）や結座の部分（補注4）が見られることを指摘しておこう。

②［禅刹記］○建仁寺両足院蔵本

○無涯和尚住肥前［後］浄土寺山門　　作者不詳

（標出―頭注ニ「柄語初一行欠」トアリ、柄語＝小序）

圓通堂上無涯大禅師、開堂演法、為

国焚修、祝延

聖寿万安者、臥龍起潜、誰枉艸廬之三顧、翔鳳応瑞、自彰文彩之九苞、直須独歩於丹霄、豈許安眠於白日、恭惟、

無涯禅師大和尚、眼空湖海、志烈氷霜、伝密旨於休居、跳出石湖死水、得賞音於吏部、拓開鉄屋重関、余子議論紛紜、何異衆盲摸衆、老師懐抱虚豁、不妨独断鑽亀、松筠遶徑梅徑軒、歳寒重理三友約、菘芥満園禾満廩、日用高歌万年歓、掃滌纎塵、安帖家国、指呼群毳、際会風雲、全憑自己之光明、便現唯心之浄土、託我師有遇、祝　聖寿無疆、謹疏、貞和戊子十月吉日

者旧比丘明密　　知事比丘正栄　　頭首比丘興善

［禅刹記］（建仁寺両足院蔵本）は入寺疏の集成で一六点を収録するが、点検するに、はじめの五点（作者不詳、南山士雲作、無等以倫作、鉄庵道生作）は未刊、次の七点（雪村友梅作）は既刊（『五山文学新集』三巻所収「宝覚真空禅師録」）、そして最後の四点（岐陽方秀作）も既刊（『五山文学全集』三所収「不二遺稿」）だといえる。

右に提示した②「無涯和尚住肥後浄土寺山門　作者不詳」は、はじめの五点のうちで、未刊である。末尾に年月「貞和戊子十月」まで記されている。

一目瞭然、これは、①（入寺語録、貞和四年戊子十月一日）に対応する（セットの）山門疏（＝入寺疏）だといえる。この山門疏の見出しで、「肥前」とあるのは誤り（もちろん「肥後」が正しい）だが、単に「浄土寺」とあるのは却って注目できる。ご覧のように、①入寺語録（貞和四年）の見出しでは「能仁浄土禅寺」とあり、先の入寺語録（康永三年）では「浄土禅寺」とあった。この②山門疏に対応して、①入寺語録に「（拈）山門疏」項が見える。

Ⅰ　日向・大慈寺関係

日向・大慈寺は、中央からは遠隔の地であるが（現、鹿児島県曽於郡志布志町）、南北朝期（十四世紀半）に諸山となり、室町期（十五世紀半）には十刹になった禅院（聖一派）である。景勝地で、『扶桑五山記』において境致として〝八景〟と〝十境〟とを併有する唯一の例であり、南北朝後期に九州探題今川了俊の意向が働き成立した「大慈八景詩歌」を残している。中世日本の代表的八景詩歌とい

え、これらの点、次に提示する室町期の『霊松集』⑥⑦の序文でも特記されている（注14）。

『霊松集』について、その概要は先に示したが（C豊後・崇祥寺の項）、実は嘗て「日向大慈寺入寺疏と京城諸山疏・相城諸山疏」において全体的に考察した（『宮崎県史研究』一一号、平成九年三月。注15）。この著者の季亨玄厳（聖一派）が何しろ日向国出身だということもあって、この疏（入寺疏四〇点）では日向大慈寺関係の入寺疏が七点も含まれ、雑著（三一点）にも日向関係のものが七点ほど含まれている。これら（一四点）は、いずれも未刊だったので、右の拙稿で翻刻し、詳細にコメント（解説、注釈）したつもりである。

入寺疏（七点）の題名は次の通りである。

①如実厳住日州大慈法眷疏

②猊俊厳住日州大慈山門疏　相城善福前住、曾在浄妙秉払

③闇如中住日州大慈山門疏　正長元年　故有聖暦之句　＊

＊一四二八年（戊申）四月二十七日に、応永（三十五年）から「正長」に改元

④胤同宗住日州大慈山門疏

⑤裔大興住日州大慈山門疏

⑥成器西堂住日州大慈山門疏　寺位陞十刹

⑦快翁剣西堂住日州大慈山門疏　西来院門徒

ご覧のように、①の「法眷疏」以外は「山門疏」である。

また⑥⑦は、序をもち、この部分の記事は詳しく且つ地域性をもっていて、内容的に極めて興味深い。ここに、傍注も施しつつ、あらためて本文を提示し、コメントを加えておこう。

⑥成器西堂位(住)大慈山門疏　寺位陞十刹

西海府日州路龍興山大慈廣慧禅寺

山門、伏審、本寺廼五山之上南禅開山大明(無関玄悟)國師法嗣玉山大禅師(玄提)瘞履之地而大樹師祖(剛中玄柔)中興之場也、惠日附庸(東福寺)而齒于諸山、有年矣、碧山環以裏寺、滄海渺以臨門、以故卜八景之住(在)境而建万年之基業、寔為九州第一之望刹也、文安元年甲子之秋、大檀越日隅薩三州史君奥州太守藤公(島津忠国)白相府陞其位、以爲大方十刹之列矣、是歳乙丑之秋、大檀越藤公謂旧住持成器禅師曰、本寺既陞其位、住持豈不改旧位乎、遂使禅師入京師、禅師傳檀越信心、復白相府、所謂為法不為名者歟、相府輙降　鈞帖、重請　禅師、以開堂演法、上祝　一人睿算、下禱九土安泰也、於茲乎、山中海衆僉曰、法道再興得人、緇林元氣復始、廼胥率具疏、以迎厥駕云、

右宓以、十信十住十回向、陞大慈為十地階梯、一華一國一釈迦、逢知識如一佛出世、自非陳力就列、争得説法應機、天地位焉、日月出矣、共惟、某人、五色獅子、九苞鳳凰、探頤石渠・天禄之群書、鑿秘金剛・胎蔵之兩部、太乙吹青藜以照讀、睫角九流、提婆把赤幡以受降、胸次八蔵、京游取交於當世人物、錦旋増輝於故國山川、邦君負弩前驅、國人望塵膜拜、山展図画、移七十二峯於洞庭、島擎蓬莱、縮三万餘里於弱水、為南豊拈一瓣、祝北闕献三呼、謹疏、

⑦快翁剣西堂住大慈山門疏　西來院門徒

日本國龍興山大慈廣慧禅寺山門疏　有序、

夫日域者、神國也、密教流傳之地而大乗醇化之域也者、神宮在天、下見大海、有大日印文、下天鉾以捜印文、其鉾滴如露迸散而為國、名曰豊葦原中津國、神宮之孫瓊杵尊受　天照大神勅、自天而降于此國、時向日之出方、故名日向國也、其饗國者、是謂天神七代、地神五代也、人皇第一國主、神武天皇者、鸕草神第四之子也、四十六歳、

始登皇位、都于日向國、故日向者、日域皇都之始也、謂之宮崎京、
實辛酉之歳也、吾龍興山大慈禅寺、乃五山之上南禅開山　大明國師（無関玄悟）
法嗣　玉山大禅師（玄提）最初行道之地也、慧日（東福寺）附庸而歯于諸山、有季矣、
建億萬年之基業而入新八景之佳境、耆宿英（納）納、公卿大夫、能詩歌者、
各賦八景、其事緒見于空華老師（義堂周信）之序、二条摂政（良基）之跋、寔為九州第一
之望刹也、文安元（三年）季甲子之秋、大檀越日隅薩三州史君（島津忠国）藤公白相府、
陞其位、以為大方十刹之列矣、寶徳辛未之冬、見缺主席、欽奉　鈞
旨、延請　前住長興快翁禅師（快翁）董蒞本寺、為國開堂、専祈
一人丕図者、
神武帝立都、懸堯日向此國、正法明現刹、有僧龍興吾山、匪人皇之
最初乎、固佛法之夙記也、某人、定光三世、大覺五傳、問西來而會
祖師禪、柏樹成佛、行東魯而學儒士術、杏壇思人、破沙盆發韶鈞之
希聲、生苕蕷索渾璞之高價、解嘲銕鑪歩、正印誰傳河東文章、取諱
金剛王、真宗能續濟北命脉、鈞帖既降、興情攸歸、萬頃波上青
螺、蓬萊可到、七里灘頭明月、珊瑚有光、爰整宗綱、式祝　皇祚、

⑥「成器西堂住大慈山門疏」は、この見出しの下に「寺位陞十刹」とある。序において、当寺大慈寺は南禅寺開山無関玄悟の法嗣玉山玄提の"瘞履之地"であり、また剛中玄柔の"中興之場"であり、東福寺系の"諸山"であること、"八景"を定め"九州第一之望刹"となったこと、さらに文安元年（一四四四）の秋、当時の南九州三ヵ国（日・隅・薩）の守護大名島津忠国（"大壇越"）が"相府"に申請して、当寺は"十刹"に昇格し、翌年の秋、この成器があらためて"京師"（京都）で"相府"（幕府）から"鈞帖"（公帖）を得て当寺住持に任命されたことなどが明記されている。

当寺が"諸山"（五山系寺院の第三ランク）から昇格して"十刹"（第二ランク）に列せられたのは、次の室町幕府御教書（管領奉書写、日向大慈寺文書）によって、まさにこの時、文安元年八月のことで符合する。

日向国大慈寺事、早可為十刹列之由、所被仰下也、仍執達如件、
文安元年八月六日　　沙弥（在判）
署判者「沙弥」は、当時の室町幕府管領の畠山持国（法名徳本）だといえる。

ここで右の幕府御教書と山門疏を併せて、『大日本史料』流に綱文を立てれば、文安元年八月六日条「幕府、日向大慈寺ヲ十刹ニ列シ、成器ヲ同寺住持ト為ス」となろう。"十刹"昇格当時の当寺住持が成器だったことも、実はこの⑥山門疏によって初めてわかるのである。

そして⑦「快翁剣西堂住大慈山門疏」の序では、冒頭にいわゆる日向神話（天孫降臨～神武天皇）の骨子を記述し、この『霊松集』の作者季亨玄厳は出身地日向国を自ら顕彰しているといえよう（お国自慢！）。続いて右の⑥の序の内容をより詳しくして、大慈寺"八景"について、"空華老師"（義堂周信）による「大慈八景詩歌集叙」や新たに"二条摂政（二条良基）之跋"に触れており、当寺を「爲九州第一之望刹也」と記し、また文安元年秋に当寺が十刹に昇格したのは、実は当時の南九州三ヵ国（日・隅・薩）の守護大名島津忠国が幕府側に申請したことによることを記している（この点、⑥と同様な記述）。さらにこの山門疏（入寺疏）においては、序の部分のみではなく、ご覧のように疏の本体にまで食い込んで「神武帝立都～固仏法之夙記也」とあって（入寺疏の構造上、この部分は蒙頭と称される）、日向国のことを顕示している。

この⑦の「山門疏」により綱文を立てれば、宝徳三年（一四五一）「是冬、□剣（快翁）、日向大慈寺住持ト為ル」となろう。

なお⑦の序文に「前住長興快翁禅師」とあって、それまで快翁□剣は長興寺住持だった由であるが、この長興寺とは、豊後・長興寺か三河・長興寺であろう（いずれも諸山、聖一派。『扶桑五山記』二日本禅院諸山座位次第事）。ここに、快翁は十刹たる日向・大慈寺の住持に昇住（栄転）した。

J　日向・大光寺関係

現在、大光寺（宮崎県宮崎郡佐土原町）に『大光寺住持長恵法語等』一冊が所蔵されている。大光寺二世日岩長恵に関する文章を集めたもので、冒頭の部分はいくらか欠けているが、三五点ほどが収録されている。内容的に興味深いものだが、先年完結した『宮崎県史　史料編』には収録されなかった。殆ど大光寺や日向関係のものだが、南北朝後期、大光寺（聖一派）の二世だった日岩長恵が駿河清見寺や安芸国長保寺（いずれも聖一派）の住持になったという、全く新しい事実を知らせる史料（入寺関係）が数点含まれておる。私（当時、宮崎県史編纂委員）は、現地で原物を拝見し、その本文を「安芸長保寺・駿河清見寺住持としての日岩長恵」（『宮崎県史研究』七号、平成五年三月）で紹介、翻刻した。

もちろん、これに日岩長恵―大光寺入寺関係の史料も含まれている。（注16）

住佛日山大光禅寺法語　再住應安六年八月廿五日入院

山門、檻前深水朝宗、屋后高峯齊崒、弾指一下、大智門開、重々渉入、佛殿、七佛令師、□徳全容、咦、智不到處、就已參窮、便礼拝、土地、虚而也靈、々而也鷹、妙用神通、鎮護宗乗、□□（祖師カ）、一牛五馬、拽杷牽犂、列聖叢裡、作者知

□□拜、

□□箆、佛来也棒、祖来也棒、如何如是有□□、

□帖（拈カ）、恵上座（長恵）、天性偏僻、嫌人繁綴、今日順人情、納□場敗闕、何也、

捧帖云、一字入公門、九牛引不出、

□座（法）、須弥高廣座、八萬由旬程、但有路可□、更無人可行、

拈衣、不是雞足山中金襴衣、亦非黄梅會裡屈眴衣、者箇是楊岐（方会）十三世、本寺開山先師嶽翁（長甫）大和尚説法衣、為什麼在山僧手裡、頂戴云、當□不讓師、

祝聖、此香、爇向金炉、奉為　當今皇帝祝延聖壽万歳々々万々歳、皇帝陛下、恭願、仁風□□（遍歩カ）、十洲三嶋唱正□（処）之音、聖澤彌深、四海九州樂無為之化、

天生万物、生人為靈、人之所重、壽与世栄、惟靈、齢至期頤、福快一生、陶朱闘富、猗頓讓禎、至矣富貴、大哉姓名、余也、蒙養育徳、荷怜愍情、如天普覆、似地普擎、父子恩愛、千金為輕、孝道義氣、三牲表誠、吁嗟悲哉、天道虧盈、老病相迫、忽夢兩楹、三春漸暮、繁花夢驚、大夜未暁、尾梁月明、北斗已殞、夜途誰行、南針云折、霧海冥々、自□（今カ）而后、誰憐孤氣瑩、天高難訴、奈我哭声、摘青山翠、汲緑水清、微奠菲薄、鑒此至精、尚亨、

ここに応安六年（一三七三）八月、つまり安芸・長保寺の住持になった（「安芸州新山長保禅寺入院法語　応安五年三月日」）翌年のこと、長恵は再び大光寺の住持として戻ったとわかる。この入寺語録には、ご覧のように「拈衣」項があり、長恵は殊更に「本寺開山先師嶽翁大和尚（大光寺初代住持）の説法衣」を取り上げている。この入寺語録（応安六年八月）も、『大日本史料』既刊（六編三十六）の時期なので、補遺として追加できよう。

K　日向・安国寺関係

日向・安国寺については、一向に史料に出会わないが、［九鼎重禅師疏］（前出）に、次のような未刊の入寺疏が収録されている。

［九鼎重禅師疏］諸山疏　○建仁寺両足院蔵本

孝甫舜首座住日州太平山安国

粛慎砮貴其遠来　希逢識者
岷山芋嗜彼異味　不称珍哉
物皆用捨有時　某　外通内介
人亦顕晦系命　歯宿意新
包袋裡古伝灯　久哉束之高閣
壁巴辺生苔帚　時也奇貨可居
書記声価益高　首座行脚有待
栄期晩達　豈日燭之武不如人
出応時縁　猶如馬伏波示可用
望福星於一路　拠上腴於九州
駕青牛而出函関　足惜遠別
斬白馬以盟桓水　勿渝初心

注

(1) 山口「日向大慈寺入寺疏と京城諸山疏・相城諸山疏」（『宮崎県史研究』一一号、一九九七年三月）、「入寺語録の構造と年表」（『東京大学史料編纂所研究紀要』八号、一九九八年三月）、「曹洞宗入寺語録のことども」（『加能史料会報』一一号、一九九九年三月。のち再録『加賀・能登　歴史の窓』加能史料編纂委員会、一九九九年一一月）、「入寺語録における自叙と叙謝」（『日本歴史』六二五号、二〇〇〇年六月）、「公帖と受請と入寺」（『日本歴史』六五三号、二〇〇二年一〇月）など。

(2) 豊後・万寿寺入寺関係史料として、既刊分は次の通りである。公帖には、文和元年（一三五二）十二月二十七日足利義詮公帖（寂室元光あて。前田家所蔵文書。『大日本史料』六編十七）がある。これは、原本であり、しかも九州関係では、原文の分かる公帖として最も古い時期のものだといえる。入寺語録には、『宝覚真空禅師語録』所収「豊州蒋山興聖万寿禅寺語録」（建武一・四・晦入院。玉村竹二『五山文学新集』三巻、以下『五山新』三などと略す）、『無規矩』所収「豊州蒋山万寿禅寺語録」（貞和二・九・八入寺。『五山新』三）、『東海一漚集』所収「住豊州蒋山万寿禅寺語録」（文和二・一二・一一入院。『五山新』四）がある。また『心岳和尚語録』所収「豊後州蒋山万寿興聖禅寺語録」は、無年号のため、『大日本史料』七編十八において心岳通知の没日条（応永二〇・五・一〇）に収めている。そして入寺疏は、年期の明らかな『瑞渓疏』所収「龍川西堂住豊後万寿山門（疏）応永癸卯（三十年）」（『五山新』五）、『心田播禅師疏』所収「喜泉西堂住蒋山万寿（山門疏）　戊申（正長元年）」（『五山新』別一）をはじめ、『禅居集』『早霖集』（以上、『五山文学全集』一所収。『五山全』一と略す）、『峨眉鴉臭集』『懶室漫稿』（以上、『五山全』三）、『曇仲遺藁』（『五山新』一）、『惟肖巌禅師疏』（『五山新』二）、『無規矩』『宝覚真空禅師録』（以上、『五山新』三）、『東海一漚集』（『五山新』四）、『瑞渓疏』（『五山新』五）、『続翠稿』『乾峰和尚語録』『心田播禅師疏』（以上、『五山新』別一）などに収録されている。万寿寺関係の入寺疏で活字化されたものは多いため、煩雑を避けて、以上、出典

（原文収録の書名）のみを掲げた。

（3）永福寺と称する禅院は、当時、官寺としては、安芸・永福寺（諸山、聖一派）のみである『東福寺諸塔頭并十刹諸山略伝』など）。同寺については、今枝愛真『中世禅宗史の研究』（二〇六ページ、二五二ページ）、『角川日本地名大辞典　34広島県』（角川書店）の「永福寺」項など参照。

（4）『晦夫集』と『晦庵稿』は、要するに信仲明篤が作成した入寺疏の集成で、両書は同じものだと見られる節があるが、通覧して点検してみると、随分異なる点に気付く。『晦夫集』は分類（山門疏、諸山疏〜）して配列されているが、『晦庵稿』はそうではなく、従って、同一内容のものでも、その見出しの立て方が異なる（ここに提示した例も同様）。また実際にカードを採ってみるに、『晦庵稿』は全八〇点ほどだが、『晦夫集』の方はそれより更に六〇点ほど多い（しかも殆ど未刊）。

（5）宝陀寺入寺関係史料として、既刊分は次の通り。『懶室漫稿』所収「集大成住宝陀諸山疏」（『五山全』三）、『雪樵独唱集』所収「徳林首座住豊之宝陀山門（疏）」「同道旧（疏）」（『五山新』五）がある。

（6）崇祥寺入寺関係史料で既刊分として、『惟肖巌禅師疏』所収「芭田稹首座住雲龍山崇祥寺江湖疏」（『五山新』二）、『乾峰和尚語録』所収「伯石楼無極住崇祥山門疏」（『五山新』別一）がある。

（7）五山系寺院における入寺の手続きは、①公帖→②「受請」（公帖の受領）→③入寺の三段階（順序）でなされたといえる。然し実際の入寺語録では、ここに掲げた平田慈均住豊後崇禅寺語録の例のように、②③の日付については表記されているが、①については見えない場合が多い。公帖などにより実例を点検してみると、①②の日付が同じ場合と、そうでない場合があると気付く。ここに掲げた例は、②「受請」の日付は表記されているが、①公帖の原文でも出現して、①②の日付が同じだとすると、この綱文は、暦応二年十二月一日条「幕府、慈均平田、ヲ豊後崇禅寺住持ト為ス、尋デ慈均入寺ス」となろう。山口「公帖と受請と入寺」（『日本歴史』六五三号）参照。

（8）肥前・高城寺入寺関係史料で既刊分として、『乾峰和尚語録』所収「範堂首座住春日名山高城禅寺山門疏」（『五山新』別一）などがある。

（9）肥前・興聖万寿寺入寺関係史料で既刊分として、『続翠稿』所収「快翁住肥之万寿（諸山疏）」、『心田播禅師疏』所収「剣快翁住肥前万寿山号水上（同門疏）」（以上、『五山新』別一）がある。

（10）なお史料編纂所に写真帳『広福寺文書』一冊（佐賀県武雄市、昭和四六年撮影）が架蔵され、若輩のころ、同室の上司今枝愛真先生や先学に同行して現地に赴き史料調査した思い出（武雄温泉に一泊）がある。それに「当寺并末寺由緒世代記」「広福寺由緒書並住持世代記」が収録されているが、ここGに掲げた「材樗翁住肥州蓬莱」に関連ある記事は全く見えない。

（11）肥後・能仁浄土寺入寺関係史料で既刊分として、『汝霖佐禅師疏』所収「倫無等住浄土山門山曰鳳翔、寺曰浄土能仁」疏（『五山新』別二）がある。

（12）南禅寺（京都五山、のち五山之上）の場合、『一山国師語録』所収「住在城瑞龍山太平興国南禅禅寺語録」（正和二＝一三一三・八・一入院）では三門〜「仏殿金剛王宝殿」〜土地堂〜祖

師堂の順であるが、『夢窓国師語録』所収「夢窓正覚心宗普済国師住山城州瑞龍山南禅禅寺語録」（正中二＝一三二五・八・二九入院）では山門〜「仏殿」〜土地堂〜祖師堂の順である（いずれも『大正新修大蔵経』八〇）。なお駒沢大学『禅学大辞典』（大修館書店）下巻―「宝殿」項参照。

(13) この点について、『大友家文書録』一の嘉暦二年（一三二七）三月条に「具簡（大友貞宗）屡草創梵刹、所謂顕孝寺、金剛法（宝）戒寺、円寿寺及肥後浄土寺也」とある（『大分県史料』三一の三四ページ）のに注目しよう。従来、この記事について、はじめの三寺は明らかで地名辞典の項目などにも立てられているが（顕孝寺＝筑前、臨済宗・諸山。金剛宝戒寺＝豊後、真言宗。円寿寺＝豊後、天台宗）、最後の肥後浄土寺についてはそうでなかった。この浄土寺こそ将に能仁浄土寺を指し（補注2）、ここに同寺の”檀那“は大友氏（貞宗〜氏泰）となったと提起したい。

実は能仁浄土寺は、その廃寺跡が熊本県下益城郡城南町にあるが、同地は、嘗ての肥後国隈牟田荘に当たり、南北朝期には大友氏当主（氏泰〜氏時〜親世）の所領があった。即ち興国三年（一三四二）六月二十日御村上天皇綸旨に「肥後国隈牟田庄内大友千代松丸（氏泰）跡」（阿蘇家文書）、貞治三年（一三六四）二月大友氏時当知行所領所職注進状に「肥後国隈牟田庄預所職」（大友文書）、永徳三年（一三八三）七月十八日大友親世当知行所領所職注文に「肥後国隈牟田庄」（大友文書）などと見える。ここに、自ずと能仁浄土寺―檀那大友氏が想定できよう。

(14) この大慈八景詩歌については、従来、その序文（義堂周信による）と詩（漢詩、五山禅僧による）についてはその本体が明らかだったが（『空華集』巻十三所収「大慈八景詩歌集叙」―『五山文学全集』第二輯、『雲巣集』所収「日州龍興山大慈禅寺八景」―『五山文学新集』四巻）、歌（和歌）についてはそうでなかった。堀川貴司氏は、先年、「大慈八景詩歌について」を公表したが（『国語と国文学』六七巻六号、一九九〇年）、その後の、別府節子氏の「畠山切について―新出断簡の紹介と二条良基との関わり―」（『出光美術館館報』一〇九号、一九九九年）の成果などを加味し、最近、堀川『瀟湘八景―詩歌と絵画に見る日本化の様相―』を成し（臨川書店、二〇〇二年）、特に歌（和歌）の本体が「畠山切」（南北朝期の古筆切）に含まれていることを指摘し、ここに大慈八景詩歌はセットとして整ったことにより、あらためてその貴重性や二条良基との関係を強調（クローズ・アップ）している。

(15) なお日向・大慈寺入寺関係史料で既刊分としては、『惟肖巌禅師疏』所収「松径存首座住日州大慈寺京城諸山疏」（『五山新』二）がある。これを機縁に、小稿で京城諸山疏・相城諸山疏を考察した次第である。

(16) 日向・大光寺入寺関係史料と思われるもので、既刊分として『惟肖疏藁』所収「宥首座住肥州大光寺」江湖（『五山新』二）がある（「肥州」とあるが、正しくは「日州」だろう）。

(補注1) 『蔭涼軒日録』（一、『増補続史料大成』＝臨川書店復刊本）において、崇祥寺については、嘉吉元年（一四四一）六月九日条に「豊後州崇祥寺乾佐首座、吹嘘東福寺祖芳」とか、長禄四年（一四六〇）九月二十三日条に「豊後国崇祥寺恵俊首座、公文御判被遊也」などと見え、崇禅寺については、

長禄二年三月十五日条に「豊後国崇禅寺住持等亶首座（中略）御判被遊」とか、文明十六年（一四八四）十二月二十一日条に「豊後国崇禅寺早準首座、公帖御判被遊之」などと見える。

（補注2）『蔭涼軒日録』（前出）において、長禄四年二月二十九日条に「肥後国浄土寺景琮首座、公文御判被遊也」とか、寛正四年（一四六三）六月二十六日条に「肥後国浄土寺允顒首座（中略）公文御判被遊也」などと見えるが、これら「肥後国浄土寺」も、能仁浄土寺のことだといえよう。

（補注3）この「当晩小参」における問答部分において、「僧云、記得、徳山小参示衆云、今夜不答話、問話者三十棒、意旨如何」～「僧云、山云未跨船舷時好与三十棒、又如何」などとあり、徳山宣鑑の古則が引用されている。この古則の原文は、『五燈会元』七、徳山宣鑑禅師の項にみえる（蘇渕雷点校『五燈会元』中冊三七三ページ）。

（補注4）この結座（拈提）での古則については、入矢義高『龐居士語録』（『禅の語録』7、筑摩書房）において、「馬祖との対話―西江の水を一口で飲み切れ」（一九ページ）として的確に原文と訳注が提示されている。